



# 東京ミッション研究所ニュース

第 90 号  
2020 年 12 月発行

〒189-8512 東京都東村山市廻田町 1-30-1 東京聖書学院内  
TEL/FAX 042-396-5597 郵便振替 00150-5-29091



## 伝統の批判的継承への謙虚で誠実な仲間

西岡義行 東京ミッション研究所総主事、東京聖書学院  
教頭、JHC川越のぞみ教会牧師

1989年の12月に、  
当研究所が発足した  
時、その中心におら  
れたのが、ロバート・

リー師でした。その直前には、同じメノナイトの宣  
教学者で、米国宣教学会の長を務めることとな  
るウィルバート・シェンク師が来日して、その研究  
所の発足直前の重要な時に講演をなさり、論文  
を書かれ、TMRIに提供されました。それは、『こ  
れからの日本の宣教』と題して出版されています。  
そのことを知らずに、私は米国の宣教学を学ぶ  
ためにフラー神学校への道が開かれました。や  
がて、シェンク師が私の論文にも関わってくださ  
る恩師となり、リー氏との深い関係を知ります。  
一度もお会いしたことのないロバート・リー師と  
の距離が縮まりました。また、フラーで宣教学や  
文化人類学を教えておられたポール・ヒーバート  
師と同じメノナイト派であることも驚きでした。

このことに加え、私の恩師である、松木祐三師  
や小林和夫師、さらに千代崎秀雄師や齋藤孝志  
師がどれほどリー師と深い関わりを持ったのか  
を知りました。そしてアジア(日本)という宣教地  
で牧師の働きを続けながら、神学的研鑽が可能  
となる Asia Graduate School of Theology で学び  
が進められていることを知り、驚きました。日本と  
いう宣教の現場においてなされる研究の場とし  
てのこの学び舎は、学問的領域においても誠実  
さをもって主の召しに答えることにつながります。

ともすると見失われてしまう、現場における学問  
的検証の重要性が、先生がたの背後で丁寧に  
指導されてこられたリー師の姿勢から伝わっ  
てきました。

リー師から受けたことは、今まで教えられてき  
たこと、受けてきた尊い伝統を受け継ぐとは、そ  
のまま無批判に受け継ぐことではないということ  
でした。何を受け継ぎ何を改革しなければならない  
かを見分けることへの真剣な取り組みが不可  
欠です。知らないうちにずれてしまう人間の営み  
が過ちを犯す可能性を認める謙虚さと勇気が求  
められるからです。しかし、その学問的研鑽も、  
同時に謙虚さが必要でしょう。それは、その営み  
を行う人間にも限界があるからです。

では、どのようにして、見分けるための研鑽が  
より相応しい形で進められるのでしょうか。その  
一つの可能性は、伝統内のみの視点とは異なる  
伝統から見ることでしょう。その意味で、メノナ  
イトの学者との出会いは、大きな出来事であつた  
と思われま。彼らに共通しているのは、「専門的  
学問性への厳密で真摯な取り組み」、「宣教の現  
場での複雑な課題への誠実さ」、そして、上下関  
係ではなく、神の前における人格的交わりを基  
礎にする「友情」を大切にしていたことでした。こ  
れらは、TMRIにとって、変えてはならない大切  
な伝統であると言ひ聞かせています。そしてその  
ことが、30周年記念論文集に流れていることを  
味わっていただければ幸いです。

## 『平和をつくり出す神の宣教』からの問いかけ

## TMRIが問うべき課題

## ～現場から問われる神学～

東京ミッション研究所は、昨年 2019 年 12 月で 30 周年を迎えた。2020 年 3 月に出版及び記念フォーラムを予定していたが、新型コロナの感染拡大で、様々な事々がストップする中で、出版も難航した。10 月中旬に何とか『平和をつくり出す神の宣教—現場から問われる神学』と題する書籍がヨベル社より出版されるに至った。本書の内容については、各章のまとめをあとがきにて紹介しており、参考にしていただきたい。さて、ここでは、TMRIがこの 30 年間に何に取り組み、今後何に向けて取り組むべきかについて、ロバート・リー氏が『平和をつくり出す神の宣教』の第 1 章「古代エルサレムから近代東京へのパラダイム転換」で十項目を立てて提示した。それらをテーマに沿ってまとめたい<sup>※</sup>。

## ◇文化脈化

最初の課題は、「文化脈化」に関わるものである。すなわち、まず宣教の最前線である日本という社会やそこに生きる人々をどう理解するかである。日本の近代化は西洋の近代化に取り込まれる形ではなく、むしろ日本独自の宗教的伝統の見えざる枠組みが今の日本社会を形成し、同時に日本人の現実認識を形作っていることを踏まえなくてはならない、ということである。それは、具体的には、天皇制という日本宣教の不可避な課題に真摯に向き合わなければならないことを意味している。

無視できないことは、福音が伝えられてきた歴

史の中で、その内容が本来のものから変わってしまい、それを左右する「ものの捉え方の変化」が認識されづらいということだ。結局、キリスト教社会(Christendom)を通して伝えられた西洋型の「福音」が、「神道社会」(Shintodom)で育まれた文化の下で生まれ育った人々に届けられた時、文明の衝突が個人の深い部分でも、家族や親戚の中でも、また社会や国家の次元でも起き、福音を受け入れる前に心を閉ざしてしまうのだ。こうした課題に取り組むため、日本文化への理解を深めることは不可欠である。TMRIでの取り組みは、故千代崎秀雄氏を中心として伊勢神宮、出雲大社、比叡山、善光寺と上田市の国分寺、高野山などを回って研修の時をもった。こうした研鑽は、発足してからの最初の十年間に頻繁になされてはいたものの、最近では実施されていない。今後も継続される必要があるであろう。また、以下に挙げる課題への取り組みは、この課題に戻ってくるといっても過言ではない。

## ◇教会と国家

次に取り上げられている課題は、教会と国家、教会と社会の関係をどう捉えるかである。具体的には、西洋型の類型によるニーバーの議論などを射程に入れる神学的課題でもあり、同時に実践的領域にも視野を広げる取り組みが求められる。神学的研鑽が社会学や文化人類学と交差しつつ、歴史を踏まえることが必要となることである。さらに、神学と実践とを二元論的に区別するものではなく、両者を同時に捉える学際的で包括的な宣教学のスタンスが求められる。これは、リー氏が 4 番目に挙げた課題、すなわち、国家社会におけるアイデンティティ構築にもつながっていく。具体的には、所属集団の見えざる伝

<sup>※</sup>ここで取り上げる内容は、記念出版の「あとがき」で詳しく述べており、TMRIが主催したフォーラムや夏季学校などのリストを項目別に紹介しているので、併せて参考にしていただきたい。

統の中に自らを位置づけるか、あるいは個人主義的な自律的アイデンティティを確立するかの間で、日本人キリスト者のアイデンティティをどう捉えるかという宣教の課題である。実際当研究所は、超教派9団体の一つとして、「戦後50年を迎える日本キリスト者の反省と課題」という声明を1995年4月10日に出した。神学的議論に終始し現実社会には傍観者となりやすい現在のキリスト者のあり方から脱皮し、実際の政治や社会の中で行動することが今後一層重要なものとなっていくことであろう。

#### ◇宣教における脱構築

プロテスタントの近代宣教運動の厄介な問題は、西洋文明の発展と宣教とが不可分であったことである。影響力を持つ一つの文明と宣教との癒着を無視することなく、同時に日本の伝統文化における近代化への批判的な理解を深めることは、双方に重要な課題である。特に、西洋のプロテスタント宣教が残したものの、すなわち世界の文明が一つへと収束するという、啓蒙主義がもたらした世界認識を浮き彫りにし、その反動としてのポストモダンが多面的世界認識をもたらしていることが、日本においてどう受け止められているかが問われなければならない。この課題は、言い換えるなら西洋キリスト教の徹底的な相対化であり、脱構築である。そのこと無しに文化脈化を望むことはできない。

これらの関連しあう歴史的、文明論的、さらには哲学的なパラダイム次元の課題は、TMRIではしばしば取り上げられてきた。特にD・ボッシュの『宣教のパラダイム転換』の出版は大きい。また、それに対する批判的考察もリー氏自身が繰り返し語ってこられたが、今後も問い続けていく必要がある。この度の記念出版はまさに、この点に対する一つの応答として理解できるであろう。

#### ◇日本人の感性に届く福音

福音が日本人に届くには、この社会文化に生きる人々の感性を無視することができない。同時に、福音宣教が、その宣教地の文化の中に同

化することもあってはならない。例えば、日本人の「和」の感覚に響きつつ、それを変革し得る神学の試みが求められている。聖書のメッセージを受け手に届けるために、聖書の時代のコンテクストに対しても、またそれを届ける日本の歴史や文化といった複雑で豊かなコンテクストに対しても、真摯に向き合うことが不可欠である。物事の解釈の枠組みを提供する文化が異なれば、福音理解、回心、教会組織や構造、キリスト者のあり方などあらゆる領域で問い直さざるを得ないからである。

これらは実際的な現場からの問いかけによって明らかにされることが多い。したがって、こうした取り組みは、机の上からではなく、宣教の現場や痛みを訴える存在の現実から始まるといっても過言ではないであろう。この領域に関連する取り組みは多岐に及ぶことから、不断の努力と検証が求められよう。

これらの四つの領域は、ばらばらなものではなく、複雑に絡み合っていることは否定できない。しかし、そうしたことを解きほぐすために、あえていくつかの側面から分析して研究することで、より多角的で重層的な理解へと進み、どこに課題があり、何を改めなければならないかに光を当てることが重要であろう。それ無しに、何らかの対応策やプログラムに拙速に飛びつくことは、かえって問題を見えなくさせたり、複雑化することにつながりかねない。同時に、議論のみに進み、議論のための議論となることも避けなくてはならない。私たちは、実践のただ中で、行動しながら同時に神学的研鑽を深め、そして見えてきた課題に真摯に向き合いつつ、自らを変えていく、謙遜かつ慎重な姿勢と、自らの誤りを変えていただくことへの大胆な勇気が今求められている。

最後に、今までのTMRIの取り組みの一覧を提示する。その一つ一つは、これらの四つの課題への取り組みと見ることができる。そして今後もそれらを継続していければと願っている。この継続を具現化する体制も、同時に問われている。(西岡義行)

東京ミッション研究所主催の研修・講義			
日付	タイトル/テーマ	講師(カッコ内レスポ ント/パネリスト)	カテゴリー
1989/9/12	宣教のパラダイムについて学ぶ等	ウィルバート・シェンク	フォーラム
1989/	第1回日本宣教研修ツアー(伊勢)	千代崎秀雄	宣教ツアー
1990	社会的、政治的視点から見た天皇制	古屋安雄	フォーラム
1990/1/09	教会の宣教のあり方	ヨハネス・アーガード	フォーラム
1990/1/22-25	天皇制の検証	藤巻 充 千代崎秀雄	牧師研修会
1990/6/28-29	説教の必要性和教会形成	山口 昇 辻 宣道	牧師研修会
1990/10/30	日本の教会の4つの型について	鍋谷堯爾	フォーラム
1990/11/27	癒しの行為	ケネス・デール	フォーラム
1991/1/29	日本文化と天皇制	久保田 周	フォーラム
1991/2/26	社会と教会との関係	ロバート・ラムザイアー	フォーラム
1991/3/12	聖書的説教	ポール・オーバーランド	フォーラム
1991/4/23	北森神学と日本宣教	北森嘉蔵	フォーラム
1991/5/27	今日における教会論と宣教	丸山忠孝	フォーラム
1991/9/17	本居宣長と日本における宣教	小畑 進	フォーラム
1991/10/11	「しもべとなった王—弟子たちから見た キリスト論」	ノーマン・クラウス	フォーラム
1991/12/3	福音主義神学と宗教的多元主義の チャレンジ	ハロルド・ネットランド	フォーラム
1992/2/18	ウェスレー神学について	清水光雄 (藤本 満)	フォーラム
1992/3/31	み言葉の説き明しと説教の位置づけ	加藤常昭 (泉田 昭)	フォーラム
1992/4/28	ウェスレー神学における聖霊論の位置	小林和夫	フォーラム
1992/5/22	4次元医療	阿久津政人(小林永子)	フォーラム
1992/6/30	ウェスレーの伝道 —説教と組合を中心として	深町正信(小林和夫)	フォーラム
1992/9/22	訴訟と和解の日米比較	マーク・ラムザイアー	フォーラム
1993/3/1	キングJr.牧師の今日的意義	ヴィンセント・ハーディ ング	フォーラム
1993/4/27	世界宣教	エヴェレット・ハント	フォーラム
1993/6/22-25	ウェスレー派の宣教の神学	エヴェレット・ハント	夏季学校
1993/6/22-25	初代教会と宣教	アラン・クライダー	夏季学校
1993/6/28- 7/2	初代教会の礼拝と宣教	アラン&エレノア・ク ライダー	夏季学校
1993/7/05-09	日本人論と日本たたきの間	ロバート・リー	夏季学校
1993/9/28	日本の近代化と福音	東條隆進	フォーラム



1994/1/25	21世紀の教会と宣教	泉田 昭、山口 昇、藤本栄造	フォーラム
1994/3/14	21世紀の教会のあり方	舟喜 信 (片岡伸光)	フォーラム
1994/6/21-24	贖罪と非暴力的愛の道	マーリン・ミラー	夏季学校
1994/09/13	「これからの日本の宣教 —発想の大転換」 出版記念	松木祐三	フォーラム
1994/11/15	キリストの平和と文化の諸領域	東方敬信(千代崎秀雄)	フォーラム
1995/4/3-5	第2回日本宣教ツアー(出雲大社と バックストンの足跡)	千代崎秀雄	宣教ツアー
1995/5/16	教会現場の周辺から信仰的な知を 求める	栗林輝夫 (東條隆進)	フォーラム
1995/6/27-30	和解の宣教	マイロン・アウグスバー ガー	夏季学校
1995/7/10	平和を実現するもの	エスター・アウグスバ ーガー	講演会
1995/09/26	女性の視点で聖書を読む	絹川久子 (斉藤、沼、芦田)	フォーラム
1995/10/16-18	第3回日本宣教ツアー(出雲再訪)	千代崎秀雄	宣教ツアー
1995/10/31	争いからの転換	デール・シューム (稲嶺純平)	フォーラム
1996/2/20	細かきを畏れ	清水 汎	フォーラム
1996/4/1-3	第4回日本宣教研修ツアー(比叡山)	千代崎秀雄	宣教ツアー
1996/6/25-28	現代における宣教の神学	ウィルバート・シェンク	夏季学校
1996/7/9-10	キリスト教宣教と近代文化	ウィルバート・シェンク	フォーラム
1997/3/31-4/2	第5回日本宣教ツアー(善光寺と上田 市の国分寺)	千代崎秀雄	宣教ツアー
1997/6/24-27	平和を創り出す営み	ロナルド・クレイビル	夏季学校
1997/10/28	日本の教会がしなかったこと、これか らするべきこと	李 仁夏 (内藤達朗 ロバート・リー)	フォーラム
1998/4/6-8	第6回日本宣教ツアー(高野山)	千代崎秀雄	宣教ツアー
1998/6/23-26	平和の福音	ノーマン・クラウス	夏季学校
1998/9/14-17	21世紀に向けて-ポスト・モダン における宣教	ウィルバート・シェンク	宣教セミナー
1998/10/06	隣人・韓国との和解を目指して	吉田晃三	特別講演会
1999/4/5-7	第7回日本宣教ツアー(明治維新と水戸)	千代崎秀雄	宣教ツアー
1999/6/22-25	戦争と平和	ベン・オーレンバーガー	夏季学校
1999/11/9	日本宣教における説教の役割	加藤常昭	十周年記念
1999/11/30	現代日本の家族の崩壊の危機 —預言者ホセアの使信	石原 潔	フォーラム
2000/02/29	ハワーワスの神学—「ポリスの神学」 美徳の誕生	東方敬信 (藤井 創)	フォーラム

2000/6/13-16	十戒とキリスト教倫理	スタンリー・ハワーワス	夏季学校
2000/9/11	宣教の宗教社会学的考察	ロバート・リー	早稲田
2000/10/3	若い教役者のために一教会者として必要なこと	ドレッシャー	フォーラム
2000/10/9-21	中国宣教スタディー・ツアー	鍋谷、小林、松木	宣教ツアー
2001/1/30	隣人への掛け橋 —政治界に生きる教会者	土肥隆一 (郷家一二三)	フォーラム
2001/2/26	日本における宣教学 —ポスト・ボッシュと21世紀	小田武彦 (小川国光)	出版記念
2001/4/23	ポストボッシュと文明の衝突	今橋 朗 (有村浩一)	フォーラム
2001/6/26	礼拝と聖餐	エレノア・クライダー	夏季学校
2001/6/26-29	<聖>をめざす旅 —新約時代から現代まで	アラン・クライダー	夏季学校
2001/6/27-28	ウエスレーと聖書における聖の概念	小林和夫	夏季学校
2001/6/29	個人的聖と社会的聖をどう捉えるか		懇談会
2002/1/21	9月11日の衝撃 —国際秩序の地殻変動	佐々木哲夫 (池田満豊)	フォーラム
2002/2/10-15	ハワイ日系人教会訪問・宣教研修旅行	鍋谷堯爾 小林和夫	宣教ツアー
2002/6/25	イエズス会のパラダイムと日本宣教	ロバート・リー	夏季学校
2002/6/25-28	歴史的転換期に宣教を問う 旧約における神の民の宣教 日本における家庭崩壊と宣教 のチャレンジ 韓国における宣教の歴史的検証	鍋谷堯爾 斎藤善樹 ヤンタエ・ハン	夏季学校
2002/9/2-3	古代日本の思想とキリスト教	喜田川信(大和昌平)	リトリート
2002/9/11	日本宣教と文明の衝突	ロバート・リー	早稲田
2003/2/10	現代における生きた伝道者 —J.ウエスレーの伝道者像	清水光雄	フォーラム
2003/6/24-27	教会者の神学—教会 カウンセリングの現代的課題	D. アウグスバーガー	夏季学校
2003/7/21-25	アジア神学会議(米国)	ロバート・リー	宣教ツアー
2004/2/2	賀川豊彦の生涯と思想	西村 虔	フォーラム
2004/6/18-19	力の論理と聖書の倫理	グレン・スタッセン	講演会
2004/6/22-25	神の国の倫理	グレン・スタッセン	夏季学校
2004/8/30-31	ポスト・モダンにおける共同体形成	喜田川 信	リトリート
2004/9/13	ポスト・モダンの方向—新しい共同体	喜田川信(東條隆進)	フォーラム
2005/1/25	旧約時代の多神教と一神教	並木浩一(ロバート・リー)	フォーラム
2005/6/24	『平和の契約』	スワートリー	講演会(OCC)
2005/6/28-27	マタイ・パウロ・ヨハネ黙示録の神学 —聖書が伝える救いの確かさ	スワートリー	夏季学校

2005/9/5-6	「平和づくりの道」 ジョン・ポール・レデラックの著作より	水野節子	リトリート
2006/2/20	包括的救済論—現実を変える神学	森本あんり(斎木満恵)	フォーラム
2006/6/27-30	新しい社会を形成する教会	ハワード・ゼア	夏季学校
2006/9/4-5	つつみつつまれる関係性の究明	阿倍仲麻呂	リトリート
2007/1/29	「平和の契約」出版記念フォーラム	石田 学 (河野克也、横田法路)	フォーラム
2007/6/26-29	宣教と教会の伝統—神学への宣教的挑戦	ウィルバート・シェンク	夏季学校
2007/9/3-4	西田哲学から聖霊の神学へ	小野寺 功	リトリート
2008/2/5	今日の日本における福音宣教像を考える	松田和憲	フォーラム
2008/6/24-27	ウェスレーの神学的遺産とその今日的意義	ウィリアム・ユーリー	夏季学校
2008/9/1-2	日本におけるヨーダー神学の意義	藤原淳賀、中島真実、矢口洋生	リトリート
2009/2/24	個人と共同体の信仰のあり方を問う—バルトとボンヘファーの違い	喜田川 信 (西谷幸介)	フォーラム
2009/6/23-26	『社会を動かす礼拝共同体』を今日に問う	マーク・ネイション メアリー・ネイション	夏季学校
2009/8/31-9/1	レデラックに学ぶ平和づくりの道	水野節子、宮崎 誉	リトリート
2010/6/22-25	幕屋と礼拝—荒野を旅する神の民	ポール・オーバーランド	夏季学校
2010/8/30-31	仏教文化と日本宣教—伝統文化との関係を捉え直す	大和昌平	リトリート
2011/2/14	ローザンヌ運動の日本宣教への意義	福田崇	フォーラム
2011/6/22-25	日本の伝統文化と宣教の実践 第1部:神道に見る日本文化の土壌 第2部:キリスト教葬制文化の開拓・その理論と実践	高桑照雄(第1部) 清野勝男子(第2部)	夏季学校
2011/9/5-6	被災現場から包括的福音を問う	米内宏明/石戸充	リトリート
2012/2/27	平和の共同体—その正義と福音	東方敬信	フォーラム
2012/6/25-27	神の言を神の世界へ—聖書全巻と福音宣教	クリストファー・ライト	夏季学校
2013/2/25	被災地の現在とキリスト者の責任	川上直哉	フォーラム
2013/6/24-26	賜物と召し—エペソ書にみる神と民の業としての教会	トーマス・R・ヨーダー・ニューフェルド	夏季学校
2014/2/24	今の時代に「次世代育成」を問う	マーク・ウィリアムズ/ 廣瀬薫/中西雅裕/ 東條隆進	フォーラム
2014/6/23-25	旧約知恵文学—神のかたちに造られた人の普段の生活を考える	鎌野直人	夏季学校
2015/2/23	聖書的説教の一方法論	齋藤孝志	フォーラム
2015/6/22-24	ホーリネスを捉え直す—ウェスレーの	アラン・カページ	夏季学校

伝統に生きる民			
2016/2/22	地域社会に開かれた教会	井上貴詞/岩上敬人/ 西岡義行	フォーラム
2016/6/27-29	イエスの共同体の神学—これからの教会形成への聖書的視点	横田法路	夏季学校
2017/2/27	地域社会に開かれた教会	横山聖司/犬塚契/ 東條隆進	フォーラム
2017/6/26-28	ダビデ王の驚くべき選び—現代に響く旧約聖書の問いかけ	ランドル・ショート	夏季学校
2018/2/28	イエスの信実への参与—パウロ贖罪論への新たな視座	河野克也(岩上敬人)	フォーラム
2018/6/25-27	ウエスレー神学の核心—変革をもたらすホーリネスの恵み	ケネス・コリンズ	夏季学校
2019/2/25	キリスト者の証言—人の言語化の営みから宣教を考える	原 敬子(西岡義行)	フォーラム
2019/6/24-26	文化の神学—神の国の平和をもたらす文化を変革する教会	藤原淳賀	夏季学校
2020/6/29-7/1	歴史に生きたウエスレー	坂本 誠	夏季学校
2021/2/22	『平和をつくり出す神の宣教』出版記念	執筆者・関係者	フォーラム

## 新刊書のご案内

### 『平和をつくり出す神の宣教 —現場から問われる神学』

#### *Mission of God the Peacemaker*



故ロバート・リー博士によって 1989 年に設立され、日本における福音宣教が持つ今日的課題に真摯に取り組んできた東京ミッション研究所。その設立 30 周年を記念した、弟子たちによる気鋭の論文集。(帯より)

- 序章 東京ミッション研究所 30 周年を迎えて 金本 悟
- 第1章 古代エルサレムから現代の東京へパラダイム転換—ボッシュより更なる展開へ ロバート・リー
- 第2章 平和神学の基盤としての聖書学的枠組み 宮崎 誉
- 第3章 修復的贖罪論の可能性を探る—パウロ神学の「新しい視点」から 河野克也
- 第4章 「グレン・スタッセンの『受肉の弟子の道』の位置と展望」 中島光成
- 第5章 スタンリー・ハワーワスの「近代的自己」批判—カント道徳神学における聖化との対比において 中島真実

- 第6章 終末的苦難のなかでの世界宣教とイエスの弟子育成—マタイ福音書におけるイエスの弟子共同体を中心に 横田法路
- 第7章 被災地から問われる包括的福音—ローザンヌ運動の視点から 西岡義行

■定価税込 1980 円 出版記念特価 1500 円 (2021 年 3 月末日まで)

■送料 1 冊 200 円 2~4 冊 400 円 5 冊以上 500 円



～\*～\*～\*～\*～\*～\*～\*～\*～\*～\*～\*～\*～

## ■ 今もどこかにルデヤが ■

OMS 宣教師 エミリー・スミス

～\*～\*～\*～\*～\*～\*～\*～\*～\*～\*～\*～\*～

「あなたは外交的だから、簡単に伝道できるでしょうね。」昨年、内気な友だちからのこの言葉に笑ってしまいました。話し好きで社交的な人は伝道が得意だというのは、おそらく一般的な考えでしょう。話し好きで気さくでも、キリストを知らない方に伝道することに苦闘する良い例が私です。使徒行伝 16 章がとても好きなのはきっとそのためです。

日本で伝道する際に、伝える必要があることについて、当然人々は興味を持たないように思います。多くの日本人はそうでした。これは、時として、伝えることを思いとどまらせました。パウロは私のように失望したのでしょうか。16 章を見ると、パウロと友人たち(シラスとルカ)は祈っている人々と合流するために川岸に行きました。その日は安息日でしたから、確かにそこには一緒に祈ることのできる人々がいました。そこで何人かの女性の方々に会おうと、パウロと友人たちは腰を下ろして話しかけました。これはとても勇敢だと思います。このように気楽には男女が社会的交流をもたない文化に反して、パウロはそれを行っているだけではなく、断られるかもしれないことを彼女たちに申し出る選択をしています。パウロは、拒絶されても仕方のないような状況に身を置いています。

私にとって、日本人に幾度も「結構です」と言われた後に、続けて伝道をするのは大変難しいことでした。拒絶されるのは好きではありません。パウロもそうであったと想像しますが、彼は、ご自分も拒絶されるような状況にまで身を置かれた主イエスを、あらゆる機会を捉えて伝えました。「ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにさ

れた。」と14節にあります。この出会いを通してルデヤはイエスを信じただけでなく、主によって心開かれ、彼らの言うことに耳を傾けるようにされたのと同様に、彼らを家にまで迎え入れます。これは彼女の家族と、やがてピリピの町全体の祝福となります。しかし、川辺に戻ってみましょう。パウロはルデヤのことも、彼女がその日そこに行くことも、心の状態をも知りませんでした。彼女は神を礼拝していましたので、主はすでに心のうちに働かれていましたが、まだイエスと出会っていませんでした。一緒に想像してみてください。もしパウロと友人たちが川岸に近づいて行って、女性の方々を見て足を止めてしまっていたらどんな様子だったかを。もしパウロが友だちの方を向いて、「彼女たちに迷惑をかけないように、そっとしておこう。」と言ったとしたらどうだったでしょうか。パウロは主を信頼しました。

人々に主イエスについて話すことは練習によってのみ容易になりますが、何度も拒まれることだけは楽にはなりません。迷惑をかけるのではとか、聞きたくないのではという、最初の恐れを、パウロのように払いのける必要があります。なぜならパウロのように、話している人がどんな方であるかを最初は知らないからです。聞いている方や川岸にただ座っている人の心に、神様が何をなされているかを私たちは知りません。その国や地域に、福音に対して心を閉ざした人々が多いかどうかにかかわらず、事実、心が開かれている方々もいらっしゃいます。次に出会う方は、他の多くの人々と同様に主に心を閉ざしていると想像するなら——日本ではそのように想像しやすいですが——私たちは福音を分かち合うことを避けてしまいます。しかし、万が一にも、心が開かれている方々であったとしたらどうでしょうか。どうぞ拒絶される恐れから、主イエスについて分かち合う機会を決して逃すことがありませんように。また、どうか主が御恵みをもって、ルデヤとの出会いに導いて下さいますように。

OMS 宣教師 エミリー・スミス

# TMRIからのお知らせ

## ◇2020年夏季学校の報告

・ 去る6月29日(月)～7月1日(水)に夏季学校がズームにて実施されました。当初予定していたケネス・コリンズ氏の来訪は、コロナ禍のため、延期することとなりました。今回は、「歴史に生きたウェスレー」をテーマに、歴史神学の学びを坂本誠氏を迎えて実施しました。50名ほどが参加し、祝福されました。

## ◇TMRI 30周年記念出版完成

・ 故ロバート・リー師記念出版を、TMRI30周年に向けて準備してきましたが、この10月に完成し、『平和をつくり出す神の宣教』と題して、ヨベル社より出版されました(1800円税別)。本書の出版のために、ナンシー・リー先生より、出版への尊い捧げものがありました。

・ 来る2021年2月22日(月)に出版記念フォーム

を予定しています。様々なことで実現できずにおりましたが、一年越しでの開催となります。ズームと対面のハイブリッドにて予定しています。詳細は感染状況によって変更されますことをご了解ください。詳しくはホームページをご覧ください。

## 献金者名

2019.12.1～2020.11.10 (敬称略 \*複数回)

◇団体：別府キリスト教会、保恵キリスト教会、蒲郡キリスト教会、新井キリスト教会\*、鹿児島武キリスト教会\*、標茶キリスト教会、長井教会、熊本植木キリスト教会、長谷聖書教会、メノナイト教会連合、サフラン会(上野教会)、大泉ぶどうの木教会。

◇個人：東方敬信、飯島延浩、飯島紀子、横坂節子、國松久永、飯島庸江、吉田章代、島田恒、三木勝善、金本史子\*、千代崎聖子、小関謙治池田洋一・恵子

\*尊い献金を心から感謝いたします。

## ◇◇◇◇◇東京ミッション研究所の関係書籍案内 ◇◇◇◇◇

- 『天皇制の検証—日本宣教における不可避な課題』 ロバート・リー編 新教出版社 1815→1400円
- 『これからの日本の宣教—発想の大転換』 TMRI編 いのちのことば社 2200→1500円
- 『宣教のパラダイム転換上・聖書の時代から宗教改革まで』 D.ポッシュ著 7370→6000円
- 『宣教のパラダイム転換下・啓蒙主義から21世紀に向けて』 D.ポッシュ著 8250→7000円  
TMRI訳 新教出版社(上下一括割引 15600→12500円)
- 『日本と西洋キリスト教—文明の衝突を超えて』 ロバート・リー著 TMRI訳 2940→2400円
- 『<聖>をめざす旅』 アラン・クライダー著 棚瀬多喜雄訳 東京ミッション研究所 3300→2500円
- 『社会を動かす礼拝共同体』 J. H. ヨーダー著 矢口以文・矢口洋生・西岡訳 TMRI 3080→2300円
- 『愛する人が襲われたら』 J. H. ヨーダー著 棚瀬多喜雄訳 TMRI 2100→1500円
- 『赦し—新しい人間関係を生み出す』D.アウグスバーガー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 1700円
- 『イエスの平和を生きる—激動の時代に読む山上の説教』 グレン・スタッセン、デービッド・P・ガッシー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 2100→1700円
- 『平和の契約—福音の聖書神学的理解』 ウィラード・スワートリー著 東京ミッション研究所訳 いのちのことば社 特別価格 7140→5000円(まとめて買うとさらに割引が可能です。)
- 『敵対から共生へ—平和づくりの実践ガイド』ジョン・ポール・レデラック著 水野節子・宮崎誉共訳、解説・片野淳彦、西岡義行 東京ミッション研究所 ヨベル社 1100円 → 800円
- 『ジョン・H・ヨーダーの神学—平和をつくり出す小羊の戦い』 ヨーダー研究会(中島真実、矢口洋生、藤原淳賀、マーク・ネイション)東京ミッション研究所 新教出版社 2090円→1700円
- 『神の宣教—聖書の壮大な物語を読み解く』クリストファー・ライト著 TMRI訳 いのちのことば社 第1巻 3080→2500円 第2巻 3410→2700円 第3巻 2980→2400円 全巻 9460→7000円
- 『イエスの足跡に従う—アナバプテテストの伝統』 A.スナイダー著 中川美弥子訳 矢口以文共訳 東條隆進監修 東京ミッション研究所 2000円→1500円
- 『社会に開かれた教会—地域の福音となる新たな一歩』 西岡義行、井上貴詞共編 いのちのことば社(TMRI協力) 1540円→1200円 (3冊以上は送料無料)

**新刊** 『平和をつくり出す神の宣教』(創立30周年記念論文集)ヨベル社 1980円→1500円